

その日私の図書館に、久方ぶりの客人があつた。どたどた音が響いてきたとき、私も知らず心が躍った。

客人は、十歳ほどの少年だった。パジャマのような見た目の服にリュックサックを背負っている。ほんの少しだけ痩せているけど、不健康ではなさそうだ。彼は私を見るなり「わあつ」と、息を漏らして目を見開いた。微笑ましいなとじつと見ていると、彼とは別の足音がした。せわしない少年のそれとは違う、おしとやかで静かな音だ。

「おい。そんなに走らないで。危ないでしょう」

「ねえちゃん、見てっ、アレ、アレー」

その少年は、こちらを指さし、大きな声でまくし立てた。後ろの女性を見もせず、すっかり私に夢中なようだ。大人の苦労も知らないで、キラキラした目をこちらに向ける。女性は彼と手をつなぎ、恐る恐るで近づいてきた。女性といってもまだ二十代ほど、ずいぶん若い客人だ。少年の指を手でたしなめて、女性は話しかけてきた。

「こんにちはーっ、はじめましてーっ」

穏やかにそう声を張る彼女に、少しだけ顔を近づける。丸顔でぱっちりとした目に、サラリと綺麗な、金色の髪。首から下げた黒いものは、一体何か分からない。とにかくもこの老いぼれに、話しかけてきてくれたのだ。挨拶でも、返してあげないと。

「初めまして——」

声を出すのも久々だから、自分の声に違和感を覚える。そんなことも知ってか知らずか、客人は目をまん丸にした。

「すっげー！　しゃべった、しゃべったよー！」

少年は、ぴよんぴよん跳ねて喜んだ。女性の方は、「まさか返事が返ってくるとは」といった顔で、ぽかんと口を開けていた。

「——私のような、『竜』と話すのは初めてかい？　驚きすぎだよ、ボク、おねえさん。

私は長生きしているからね、喋ることだってできるけど……ここに、何しに来たのかな？」
竜。かつてはヒトと敵対し、長らく戦いを続けてきた。けれども確か百年前に、人間同士で戦争をした。国をいくつも巻き込んだ、大きなおおきな戦争だった。やがて戦火が収まると、ヒトは平和を唱えはじめた。竜との戦いも、そこで終わった。といっても、その時私は隠居の身。本やヒトからの又聞きだ。

少し姿勢を正したあとに、翼をわずかに動かした。私が軽く咳払いせき払いすると、火の粉が漏れ出て舞い散った。

「おっと、すまない二人とも。炎はとても危険だからね」

「こつ、こちらこそごめんなさい、急に話しかけちゃって！ ほら、ハル。落ち着いて」

ハルと呼ばれた少年は、「うん」と元気に返事した。しかし興奮冷めやらぬまま、キョロキョロ私を見渡している。

「話し相手がいなかったんだ、ありがとうと言わせておくれ。代わりになんだがおねえさん。首から提げているのは何だい？」

「あつ、これはカメラ……ええと、撮影機？ とにかく写真を撮る機械です」

「なるほどそれは、写真機なのかな。そうか、ずいぶん小さくなった。ヒトの進歩は、めざましい」

「私、カメ……写真家をやってます、カヤっていいます。こつちの子はハルです、ほらっ、挨拶して」

私にカヤと名乗った女性は、静かにカメラを撫なでながら、挨拶するように促した。

「こんにちはー！ あのさ、ねえちゃん！ 撮とってよ、写真、ドラゴンの！ オレ持って帰って自慢するー！」

『『ドラゴン』じゃないでしょう。ええと、なんてお呼びすればいいですか？』

「私はドラゴンでもいいけれど。あだ名みたいなモノでもつける？ ボク、お好きに呼んでもいいよ」

「ええと、じゃあ、『ドラゴンさん』はどう？ ねえちゃん、それならよくない？」

ハルが笑ってそう言った。カヤも笑顔でうなずくと、ハルは改めて私を呼んだ。

「何かな。写真だったら、もちろんいいよ。今の写真は、どんなふうに写るのかな」

「マジー？ やったあ！ オレさつ、みんなにドラゴンさんの自慢してもいいっ？ みんな見たことないって言ってたの！ 俺さ、びょういんの……」

「ハル。落ち着いてー！」

ハルは天性の腕白わんぱくで、元気な少年なのだろう。嵐に揺れる木のように、体をぶんぶん揺らして。カヤはチラチラ彼を見て、気が気でない様子だった。

「大丈夫、時間は沢山あるからね。ほうら、ゆっくり話してーらん」

一緒になってたしなめると、彼はようやく動きを止めた。呼吸も忘れて話したようで、顔が熟れたリンゴのようだ。

「えっとね、オレ入院してるの。脳機能？ に問題があるんだって。それで、今度シジュツするんだけどね、ドラゴンに会いたって言ったら、特別でOKが出たんだ！」

笑ってはいけないとは思いつつ、太陽みたいな屈託ない笑顔に、思わず笑みがこぼれてしまう。

「本当はこの子連れ出すのはNGなんですけど……この子担当の先生が無理を通したみたいで。私は付き添いみたいなものなんです」

「無理が通るということは……相当大きな手術なのかな」

そう訊くと、ばつが悪そうに力やがうなずく。手術を受ける本人は、どこ吹く風で平気そう。つまるどころ、「最期になるかもしれないのだから、我儘^{わがまま}だって聞いてあげよう」といったところか。

「そうっ！　なんかね、すっごい大きな病院行くんだよ！　ドラゴンって病院行ったことあるの？」

「いや、無い。ハルは、病院が好きなのかい？」

「ううん。スマホもゲームも、もう飽きちゃった。ずうっとおんなじ部屋でつまんないの！　ドラゴンさんは？　ずっと図書館にいるの、つまんなくない？」

「それも、無い。私はね、ずっと昔に約束をした。それを果たしてしまうまで、私はじっとここにいます」

「ふうん……」

ハルは口をつんと尖^{とが}らせ、そっぽをむいてすねてしまった。ああ、もしかして私と同じだと言いたかったかな。

「それじゃ、ハル。そこからキミの右側を見ると、細い本棚があると思う。その本棚の下から数えて、三つ目の段の、右から五番目。真っ赤な本を、持ってくといい」

「えっ？」

「私は大きくなりすぎて、本を取るのが難しい。私のウロコの色をした、少し変わった表紙だよ」

「わ、わかった！」

駆け出すハルと、追いかけるカヤ。彼女に優しく「待った」と告げる。

「おせっかいかもしれないけれど、一人でやらせてあげたいな。代わりと言ったらなんだけど、私の写真、撮らないのかい？」

「ハルに何を取らせるんですか？　それに、写真って……」

「ハルのことなら、心配ないよ。この図書館に、怪我^{けが}させるものは何もない。私の写真は、ハルと一緒に撮るのかい？」

「いえ、できるならドラゴンさんだけを。分かりました、それじゃあ、お言葉に甘えてもいいですか？」

もちろんいいよと返事をする、カヤは静かにカメラを構えた。穏やかそうな表情が、真剣さを帯びてゆく。カシャ、という音がすると、彼女がゆっくり顔を上げた。

「ありがとうございます」

「とんでもない。ハルもそろそろ帰ってくるかな?」

そういうとちょうど、ハルは一冊の本を持って帰ってきた。日焼けした、赤い装丁の小さな本。

「入院している少年が、友達探しをする話。きっとハルなら気に入るよ」

「ドラゴンさんって全部の本を覚えてるの?」

「こんなことなら、何でもないさ。伊達に長生きはしてないよ」

私はハハハと笑って言った。どうしてこんなに嬉しいのだろう。ずいぶん長くここにいたから、人肌恋しかったかな。

「本当にコレ、貰^{もら}っていいの?」

「ここは図書館だからねえ、ちやあんといつか、返しに来てね」

「分かった! それじゃバイバイ、ドラゴンさん!」

「今日はありがとうございます!」

ハルはドタドタ出て行って、カヤは恭しくお辞儀した。あわててハルを追うその背中に、私は「またね」と、言おうとした。

自分でもなぜだか分からないが、言葉がつかえて出てこなかった。

図書館は、再び静寂に包まれた。私はぼんやり窓を眺めて、昔のことを思い出す。「約束がある」と言ったのに、その約束が思い出せない。とても大事な友人と、ここで約束したはずなのに。

数日経ったある日の朝、何だか外が騒がしい。ドスドスドスと嫌な音が、図書館の中に響き渡る。十数人のヒトが、突然図書館に押し入ってきたのだ。

「皆さあん、見てくださあい! これがあ、図書館に閉じ込められたドラゴンです! このドラゴン^{すみか}はあ、もともとの住処を人間におわれてえ、こんなに窮屈なところで過ごしているんです!」

突然そんなことをいわれ、私は面食らった。キンキン響く高い声で、その女は喋り続ける。30代くらいだろうか、少し派手な服を着た女。何だかずいぶん失礼な、あることないこと言われたような。その女と一緒にいる人々は、何ごとかを喚^{わめ}き散らした。

「竜^{りゅう}が可愛いそうだ!」

そんな声が、雑音の中から聞こえてきた。うるさいからやめろとも言えずまじまじして

も、彼らの熱気は増していくばかり。

彼らの後ろで俯うつむいている、青年にふと目が留まる。騒ぐ彼らと対照的に、静かに壁に寄りかかっている。背中に大きな銃を担いで、真っ黒な服に身を包んでいる。年齢の程はこの前の、カヤと同じくらいであろうか。そちらをじつと見ていると、女がまた声をあげた。

「人間に虐げられた竜を助けましょう!」

「あのう」

耐えかねた私が声をかけると、その場は一瞬で静まり返った。

「失礼ですが、何用ですか」

「私たちは、あなたを助けに来たのです!」

ギラギラとした目でこちらを見る女。ハルの目線より、なんだか空恐ろしい。助けに来たと言われても、特に困ってはないのだけれど。

「アナタは人間に虐げられていますよね! こんなこと、あっちゃいけないですよ! ハ

ンターに追い回されて、住処すみかを追われて……」

「そんなことはない、私は約束があるからここに住んでいるのだ」

相手の言葉を遮ってまできっぱりと私は伝えた。しかし相手は聞く耳を持たず、あまつさえ「人間に言わされている」などと言い出した。ヒートアップしたその連中は、黒い服の青年にも突つかかる。

「どうして竜を殺すんだ! 竜はこんなにも怒ってる!」

「私は別に怒っていないんだけど」

青年はただただ、黙って彼らにもみくちやにされていた。どうしてこうなったのか、彼らは何がしたいのか。まったくもって分からないまま、私は話を聞いていた。なんでも彼らは、この図書館を壊したいらしい。

「こんなところに閉じ込められるのは間違っています!」

そんなことを、それも自信満々に言うものだから、私は無性に頭にきた。この図書館を「こんなところ」などと、呼ばれたくはない。

「失礼だが、お引き取り願おうか!」

ゴウ、と私の口元で炎が渦巻く。目の前にいた女の髪に、火の粉の一つがしゅつと触れた。

「ギャ——っ!」

女は大げさに悲鳴を上げると、黒い服の青年に駆け寄った。

「ちよつと、何とかしてよ! あんたハンターなんでしょ! ほらっ!」

ドンと突き飛ばされるように私の前に立たされた青年は、心底いやそうな顔で私に銃

を向ける。撃つ気がないのはすぐに分かった。引き金に指がかかってすらいないのだ。

「皆さーん、逃げてくださーい。人を傷つけたら撃つぞ、ドラゴンめー」

覇気のない声で、青年は騒がしい人々に呼びかけた。連中はそそくさとどこかに行ってしまい、彼だけが一人残された。

けだるげに銃を下ろした彼は、こちらに話しかけてきた。

「あー、その、なんだ。災難だったな、あんた」

「ああ、親切にどうも。ええと、君はハンターなのかな？」

ハンターというのは、熊とか鳥とかを狩る人の総称だ。私が図書館に居つく前まで、狙われたことが何度かあった。マタギとか、そういう呼び方をするヒトもいると聞く。

「一応まあ、そうかな。そうなんだけど、今時動物を狩るのも厳しいんだよ。今みたいに、意味わかんねえ奴^{やつ}らのお守が主な仕事だ」

「彼らはいったい何なんだい？」

「愛護団体とかいう奴。なんでも、世界中で竜が減ってるんだってさ。で、それは人間のせいだからかわいそうなドラゴンは保護しますーって」

そう言うとは彼は、肩をすくめた。ヒトが竜を保護するなんて、時代は変わるものだ。

「はあ、とにかくにも、一息つこうか。君も何やら揉^もまれていたことだろう？」

声をかけると彼は「どうも」と短く返して、地べたに腰を下ろした。大きく息を吐きだして、一度大きく背を伸ばす。

「ドラゴンって喋れるんだな、びつくりしたぜ。えつと……あんた、名前は」

「特にない。好きに呼んでいいんだよ。逆に聞くけど、君の名前は？」

「エレン。まあ別に、お前でも君でもいいけどさ。ところで一つ、訊いてもいいか」

「もちろんだ」

「あんたどうして、ここに住んでるんだ？ ずいぶん狭いだろ、あんたにとっちゃ」

「約束なんだ。ずっと昔に、ここでした。大事な友との約束なんだ」

「約束って、どんな約束だよ」

「それは……忘れてしまった」

「それじゃあ約束の意味がねえだろう。何を守ればいいのかもわかんないなんてさ」

「いいや。思い出がなくなったとしても、約束だけは残るんだよ」

「そっか。でも本当に、災難だな。あんた」

エレンはだるそうに立つと、懷から黒い板をだした。その板を何やらたたくと、それをこ

ちらに向けてくる。

「この図書館、取り壊すことになるかもよ。そしたらあんたが、邪魔ってことになる。メガソーラーだったかゴルフ場だったか忘れたけど、まあ人間が決めたことだし。あんたは、知らないかもな」

小さなちいさな黒い板には、『竜の図書館 建設に影響』とあった。

「この小さな黒い板は？」

「ああ、スマホ知らないか。スマートフォンつつて、ええと。電話は分かるか？」

そういえば、ハルが以前に言っていた。「スマホもゲームも、もう飽きちゃった」

「電話かい。こんなに小さくなったのか。それでその、この図書館を壊すというのは？」

「スマホは電話つてだけじゃなくて、新聞とか本も読めるんだよ。それでほら、このニユー・ス。国の偉い人が、ここにでかい建物を建てるんだってさ。それであんたをどうするよつて話。はっ、勝手なもんだよな」

「エレンは彼らが嫌いかい？」

「どっちでも。ああでも、愛護団体は嫌いだね。ハンターつてだけで悪者扱い」

「大変だったね、お疲れさま。それにしても、そのスマホ。本を読むことができるのかい？」

「ああ、できる。この中に本のデータが入つて……」

そこからは、エレンにスマホを教えてもらった。音楽、写真、そして本。今じゃスマホで、全部ができる。時間の流れは速いものだが、ほんの少しだけさみしくなった。一時間ほどエレンと話して、そのまま彼は帰ると言った。

「楽しかったよ、ありがとう。正直いやな仕事と思っていたけど、まさかドラゴンにスマホを教える日が来るなんてな」

「こちらこそ。私の方こそ、楽しかったよ。また来てほしいな」

「ああ、じゃあまた」

そっけない背中が遠ざかる。私は図書館に取り残された。ハルの時は本を貸したのに、どうして今日はそんな気になれなかったのだろうか。

「図書館はもう、いらないものなのか」

「……最近、知らない音を聞くようになった。ガキンガキンと乱暴で、無機質な音が嘶うないた。どうやら工事が始まった、私の住処を壊す工事が。」

その日、ドタドタという足音がした。ハルの足音ではないだろう。複数人の音でもない。誰かと思って見てみれば、血相を変えたカヤだった。

「あのっ、ドラゴンさん！ 失礼します、あの、わたし……！」

「落ち着いて。大丈夫だよ、ここにいます。まずは一旦、深呼吸して」

今まで見たことないくらい焦る彼女を落ち着かせ、私はゆっくり、尋ねてみた。

「ハルの手術は終わったのかな。言える範囲で、聞かせてほしい」

私は内心、気が気じゃない。ヒトの命は短いものだ。太陽みたいなあの少年が、今日はどこにもいないから。

「手術はまだ始まってません。あと二日なんですけど。手術が近付いたら、あの子急に怖いつて言い出して。って、それより！ この図書館がなくなっちゃうって本当ですか！？」

「私もこの前聞いたところさ。どうしようかね、困ったものだ」

カヤマで話を知っているとは。私のあずかり知らぬところで、話が随分進んだらしい。

「この前あなたに会った後、ハルが『絶対またここに来る』って言ったんです。だから」

「私もあまり、嬉しくはない。しかしどうすれば止められるやら」

「ドラゴンさん、ハルの話を聞いてくれませんか？」

どうやって？ そう尋ねると、カヤは黒い板を取り出した。スマホを大きくしたようなそれを、カヤは素早く操作する。「これで」といったカヤの手元に、太陽のような笑顔が映った。

『ドラゴンさん！』

ベッドに寝かされているままでも、あの少年は明るいままだ。前会った時と変わらない。違うところがあるとするなら、目元が少し赤いところか。

『オレね、ビデオレター？ って初めてやるの！ どう？ ちゃんと映ってる？』

カメラの扱いはカヤがやったのか、とてもきれいに映っていた。

『えっとね、ドラゴンさん。オレ、ドラゴンさんの約束は分かんないけど。かっこいいなって思ったの！ だからオレとも、約束してよ！』

『オレが退院したら、ドラゴンさんと旅に出るの。それで、その旅を本に書くんだよ！ きっとすっごい面白いから！ 約束！ だからオレ、シュジュツ頑張るね！』

念押し『約束だよ』という言葉を最後に、ビデオレターはプツリときれてしまった。

その瞬間、私の頭に記憶が駆け巡る。

『なあ。僕が死んだら、お前はどうするんだ？』

「さあ、どうもしないよ。私に本を読んでくれるもの好きなんて、後にも先にも君しかない」

『僕ならそうは思わない。何千年、何万年という時を過ぎせば、きっと出会うよ。僕によ

うなヒトにや』

「君のような人にあつたところで、それが何だっていうんだ？」

『君さ、その人と本を作つてよ』

「本？」

『そうだ。君がこの図書館にある本を全部読み終わつたら、その時君と一緒にいる人と、本を作つてほしい。僕はその本が読みたいんだ。あの世まで、その本を持ってきておくれよ』

「どうしてそんなことをしなくてはならないんだ？」

『本を読むということはね、時代も、性別も、種族さえ超えて、その人と知り合い、友となることなんだよ。だから、僕の見ることができない、遠い未来のひと、僕は友達になつてみたい。千年、万年を生きるキミにしか頼めないのさ。約束、引き受けてくれるかい？』

私は目を見開いて、思い切り翼をはためかせた。

「きやつー？」

カヤの小さな、悲鳴が聞こえる。

「ああ済まない、カヤ。……きみとハルのおかげで、思い出したことがあつてね」

「思い出したこと？」

「ああ、ハルが言つた約束さ。そうだ、私の古い友達も、私に本を書けと言つてきた。とんでもない偶然さ」

ガラガラと、図書館の崩れる音が聞こえた。それでいい、それがいい。私は、久しぶりに大きく飛びあがつた。

私は大きく息を吸い込み、ひと息に炎を空へと吐いた。遠い病室からでも、しっかりと見えるように。

「約束だ！ キミが手術を無事に終え、元気になったらまた会おう！ とともに世界を見て回り、本にしてみせようじゃないか！」

大きな声で啖呵たんかを切つて、そのまま遠くへ飛び去つた。久しぶりなせいで、飛び方が不格好なことを隠して。

数年後、私の巣穴に來客があつた。つかつか音が響いてきたとき、私も知らず心が躍つた。

客人は、二十歳ほどの青年だった。動きやすそうな見た目の服に、リュックサックを背負っている。ほんの少しだけ痩せているけど、不健康ではなさそうだ。彼は私を見るなり「久しぶり」と、息を漏らして目を見開いた。

「さあ行こう、まだ見ぬ世の人々を、友とするための旅路へと」

（了）